

ニガウリの新品種 “宮崎緑” について

河原一五郎・田村逸美・*渡司照久 (宮崎県総合農業試験場・*小林農業改良普及所)

KAWAHARA, I., I. TAMURA and T. WATASHI: A New Cultivar of Balsam Pear “MIYAZAKIMIDORI”

ハウス栽培のニガウリの品種は、従来から在来種を自家採種して栽培しているが、白色系のものが多く、栽培者毎に形質が違い不ぞろいである。また、市場では緑色系のものが好まれるが、緑色系の品種は雌花の着生が悪く収量の低いものが多い。筆者らは1973年に、緑色果で長型多収品種の育成を目的に品種育成を開始し、当初の目標に近いF₁組合せ“宮崎青長2-9”×“佐土原13”を得て“宮崎緑”と命名したので、その育成経過と特性の概要について紹介する。

1. 育成経過

1973年から育種素材を収集し、品種比較試験、系統選抜を行い、1980年に選抜、固定を終了して、F₁組合せの採種を行い、1981年から能力検定を行った。その結果、緑色系の“大長二尺”から選抜した“宮崎青長2-9”を母親とし、白色系の“佐土原”の中から選抜した主枝雌花節率の高い“佐土原13”を父親とするF₁組合せが最も優れた。

2. 特性

1) 草姿 草姿は“宮崎青長2-9”とほぼ同じで、おう盛な生育をし、側枝もよく発生する。初期のつるの伸長は“佐土原13”よりやや遅れ、節間長が短く草丈はやや低い。また、葉も“宮崎青長2-9”とほぼ同等の大きさで葉色は緑色である。

第1表 草 姿(1982. ハウス後作)

品種名	節間長 (10-13節)	側枝 発生	草勢	葉 形			
				葉長	葉幅	切れこみ 程度	葉色
宮 崎 緑	7.7	◎	◎	12.7	14.7	0.63	緑
佐 土 原 13	9.2	△	△	13.4	16.2	0.68	淡緑
宮崎青長2-9	7.4	◎	◎	13.1	14.6	0.67	緑

注) 切れこみ程度 = $\frac{\text{切れこみ深さ}}{\text{葉長}}$

2) 雌花の着生 親づるの雌花着生率は両親の中間型を示し、“佐土原13”よりやや劣るが“宮崎青長2-9”よりかなり高い。また、子づるの場合は両親より高い着生率で、低節位から着生する。子づる以下の側枝にも低節位からよく着生する。

3) 果実の特性 果皮色は“宮崎青長2-9”と同等の濃緑色である。収穫適期の果実は150g程度で、果長は約33cmになり、“佐土原13”よりやや短い“宮崎青長2-9”より4cm程度長い。果皮面は“宮崎青長2-9”に比べて条状突起がやや長くて丸く、こぶ状突起はやや大きくて丸く、そりが小さいので全体としてやや滑らかである。果形は、尻部がややこけるが肩部はやや張り、長型円筒形で形状は安定している。

第2表 果実の特性(1982. ハウス後作)

品 種 名	果形(5月上旬)			果色	果面	肩部 の形	尻部 の形
	果重	果長	果径				
宮 崎 緑	152 g	33.7 cm	3.7 cm	濃緑	やや 滑か	やや 張り	やや こける
佐 土 原 13	163	34.5	3.5	クリーム ~淡緑	"	やや 流れ	"
宮崎青長2-9	151	29.2	3.8	濃緑	やや 尖り	やや 張り	"

4) 収量及び品質 5月までの早期収量は両親より高く、“宮崎青長2-9”に対して約35%、“佐土原13”に対して20%程度増収する。

7月までの総収量は両親より高く、“宮崎青長2-9”に比較して30%程度増収する。A品率は“宮崎青長2-9”と同等で、果長が長い安定して高く、A品収量は“宮崎青長2-9”に対して30%程度増収する。

第3表 雌花着生と収量(1982. ハウス後作)

品種名	雌花着生率		総収量		A品収量		A品率
	親づる	子づる	重量	比	重量	比	
宮 崎 緑	45.3 %	48.0 %	821.0 kg	132 %	605.9 kg	132 %	73.8 %
佐 土 原 13	54.7	41.3	762.4	123	517.3	113	67.9
宮崎青長2-9	29.3	32.0	620.0	100	459.8	100	74.2

注) は種1月30日、定植3月19日、栽植距離180cm×65cm、収穫期7月31日まで

第4表 雌花着生と収量(1982. ハウス後作)

品種名	雌花着生率		総収量		A品収量		A品率
	親づる	子づる	重量	比	重量	比	
宮 崎 緑	45.3 %	48.0 %	821.0 kg	132 %	605.9 kg	132 %	73.8 %
佐 土 原 13	54.7	41.3	762.4	123	517.3	113	67.9
宮崎青長2-9	29.3	32.0	620.0	100	459.8	100	74.2

3. 適応作型及び栽培上の注意

県内のハウス栽培、露地栽培に適応できるが、気温が低いと果長が短くなるので、生育最低気温8℃以上、着果時12℃以上が必要である。

栽培法は畦幅180cm×株間100cm程度の垣根作りで、2本仕立ての摘心栽培が適当である。その場合、側枝は混み合わないよう雌花着花の1節上位で摘心し、1つる1果着果が望ましい。